

人文会 ニュース

jinbunkai news

April 2026

NO. 152

1
15分で読む

ハイデガーの途切れた時間と
存在を引き継ぐ時間

串田純一

16
書店現場から

バリユーボックス・飯田光平氏インタビュー

38
図書館レポート

出版文化の発展に寄与できる図書館、図書館員とは

—— 塩尻市立図書館の取り組みから考えてみる 北澤梨絵子



www.jinbunkai.com

山田七絵、内藤寛子 編著

アジア・トイレ紀行



トイレが社会を映し出す！
トイレから文化を理解する！
トイレをめぐるカルチャー・
シヨックを綴るユニークなエッ
セイ。 図版多数。

● 2200円

白水社 東京都千代田区神田小川町3-24
tel.03-3291-7811 ●価格税込

ミネルヴァ日本評伝選

豊臣秀吉

藤井讓治 著

— 秀吉新王ニナリ秀長八関白ニ成ル

名と権勢を残すことを望んだ天下人・秀吉その行動と
思考を史料から読み解く

税込3850円

藤堂高虎

侍は討ち死に仕り候か本儀二候

藤田達生 著

税込3080円

明智光秀・秀満

ときハ今あめが
下しる五月哉

小和田哲男 著

税込2750円

ミネルヴァ書房

〒607-8494 京都市山科区日ノ岡堤谷町1
TEL075-581-0296 価格税込/宅配可

フェイクニュースの免疫学

ヴァン・ダー・リンデン SNS全盛の現代社会に欠かせない「心のワクチン」学。笹原和俊監訳 松井信彦訳 四六〇円

格差の国の経済学

ディートン「人間科学に返る画期となる書」P・コリアー。ノーベル賞受賞者が温かい筆致で綴る。江口泰子訳 三六〇円

将軍の都の客人

越後の寺娘・常野（つねの）、江戸を訪う

スタンリー 19世紀前半の江戸に生きた女性の生涯を歴史家が読み解く。高田郁氏推薦。原直史監訳 石垣賢子訳 三六〇円

つくられた日本の自然

大貫恵美子 始源の桶、万葉の四季、枯山水、文化的ナンヨナリズム、消費主義。自然という作為の人類学研究。三〇〇円

みすず書房 (税込)

東京文京本郷2-20-7 www.ms.z.co.jp

日本史のなかの酒

「日本歴史」編集委員会編 歴史のスペシャリストたちが織りなす酒の肴になる話。 2420円

〈主婦〉という職業 「愛の労働」の近現代

木村涼子 著 家庭を運営し家族ケアも担う神聖な仕事と賞賛されつつ無償の家事労働を強いられる歴史。 2420円

「平和国家」日本の軍事を考える

自衛・安全保障・国際協力

佐道明広 著 国際環境の変動の中で明確な国家像を欠いたまま防衛政策を進めてきた歴史を考察する。 2750円

吉川弘文館

東京都文京区本郷7-2-8
☎03-3813-9151 税込



ハイデガーの途切れた時間と存在を引き継ぐ時間

串田 純一（早稲田大学ほか非常勤講師）

「15分で読む」と題されたシリーズの末席に連なるこの小論を今まさに読み始めている皆さんであれば、たいていの場合、少なくとも15分という時間をすでに確保し「持っている」に違いない。それではしかし、その15分は果たしてどこに在るのだろうか。これから使われるであろう時間は「未だない」と考えざるをえない。では、仮に15分が経ったとして、そのときにはこの時間が在ることになるのだろうか。いや、経過した時間は「在った」とは言えるかもしれないが、もはや在るのではない。そして読んでいる最中は常に「今」でしかない。ということは結局のところ、15分なるものはどこにも存在しないことになる。にもかかわらず私たちは日々、何かをする時間が「ある」とか「あまりない」とか言いながら、互いに何の問題もなく理解し合っている。かくして、

早くも五世紀にアウグスティヌスはこう慨嘆することになった。「わたしたちは時間について語るとき、それを理解しているのであり、また、他人が時間について語るのを聞くときにもそれを理解している。それでは、時間とはなんであるか。誰もわたしに問わなければ、わたしは知っている。しかし、だれか問うものに説明しようとする、わたしは知らないのである」（告白（下）、一一三—一四頁）。

その一方で——アウグスティヌス自身は直接知ってはいなかったようだが——そのさらに八百年ほど前にも、ほとんど同じことが「存在」についてもすでに語られていた。「……というの、存在している」という言葉を使うとき、いったい何を意味しようとしているのか、君たちはそれを以前からとっくに知っているはずだから

だ。ところが、我々の方はといえば、以前は知っている
と信じていたのに、いまや困惑に陥っているのだから。

そして、プラトンの対話篇『ソピステス』のこの箇所
(247a)を掲げることによって開始され、以後の哲学と思
想を根本から変えてしまったのがマルティン・ハイデ
ガーの『存在と時間』にほかならない。一九二七年にこ
の著作がフッサール主催の『哲学と現象学的研究のため
の年報』第八巻に発表されてから間もなく百年となるが、
そこでは時間と存在という先に見た二つの謎が、「存
在の意味は、すなわち存在の理解を可能にしている超
越論的地平は、根源的な時間である」という仕方では結
びつけられることになっていった。なっていた、と言うのは、
よく知られているように本書は最後まで完成されること
がなかったからである。序論では次のような構成が予告
されていた(S.39-40)。

第一部 時間性へと向けた現存在の解釈と、存在へ
の問いの超越論的地平としての時間の解明。

第二部 時性の問題系を手引きとする、存在論の歴
史の現象学的破壊の要綱。

第一部は三つの編に分かれる。

- 1 現存在の予備的な基礎分析。
- 2 現存在と時間性。

3 時間と存在。

第二部もやはり同様に三編から成る。

- 1 時性の問題系の前段階としての、カントの図式論
と時間論。

- 2 デカルトの「私は考える、私は存在する」の存在
論的基礎と、中世の存在論が「思考するもの」の問
題系へ引き継がれていること。

- 3 古代存在論の現象的土台と限界とを判別する基準
としての、時間を巡るアリストテレスの論述。

このうち実際に出版されたのは第一部第二編までであり、
第二部の内容は前後の講義や著作を基にかなりの程度推
察できるとされる一方で、「存在への問い」の核心をな
すはずだった第一部第三編「時間と存在」は深い謎に包
まれたままである。その再構成、および中断の理由の解
明は、今日に至るまで余りにも魅力的かつ困難な課題で
あり続けているが、まずは彼自身の言うところを聞いて

みよう。

『存在と時間』の途絶を巡る自己解釈

この点については、戦後の一九四六年にフランス人研究者ジャン・ポーフレが寄せた問いに応える形で書かれた書簡『「ヒューマニズム」について』の次の箇所がよく知られている。

主観性を捨て去ってゆくこの別の思索を、十分に跡づけし直しつつまたそれと一体化しつつ遂行してみることは、『存在と時間』の公刊に際して、「時間と存在」というその第一部の第三篇が、差し控えられたことによって、困難にさせられている（『存在と時間』三九頁を参照）。ここで全体が逆転する。問題の第三篇が、差し控えられたのは、思索が、この転回を十分に言い述べようとしてもうまくゆかず、また、形而上学の言葉の助けによっては切り抜けられなかったからであった。一九三〇年に思索されて打ち明けられながら、しかしようやく一九四三年になって初めて印刷された

『真理の本質について』という講演が、『存在と時間』から「時間と存在」への転回の思索の内部を窺わせる。若干の洞察を与えている。この転回は『存在と時間』の立場の変更ではない。むしろ、この転回において初めて、かつて試みられた思索が、そこから『存在と時間』が経験されておりしかも存在忘却の根本経験にもとづいて経験されているところの次元を成す場面のうちへと、到達するのである。（四九一―五〇頁）

また論集『言葉への途上』所収の「言葉についての対話（より）」では、次のような遣り取りが設定されている。

日本人 言語と存在について問うというのは、ことによると、あなたに当たった光線の贈り物かもしれないですね。

問う人 そういった贈り物が自分に向けられたなどと思いつくことなど誰に許されましょう。私に分かっていることといえば、言語と存在とについての省察が私の思索の道を早くから規定しているがために、それらについての論究はできるかぎり背後にとどまるとい

うこと、唯一これだけです。ことによると、私があまりに早い時期にあまりに遠くまで大胆に進みすぎてしまったというのが『存在と時間』の根本欠陥かもしれません。

日本人 言語に関するあなたのお考えのほうについては、そのようなことはほとんど主張できません。

問う人 たしかに言語のほうについては、それほど大胆であったわけではありません。教授資格論文から二十年を経て、ようやく、ある講義の中で言語の問題を論じてみたわけですから。それは、私がヘルダーリンの頌歌について最初の一連の解釈を講義の中で伝えていた時期のことでした。一九三四年の夏学期に、私は「論理学」という標題でひとつの講義を行ないました。それはしかし、ロゴス [Logos] についての省察で、このロゴスに、私は言語の本質を見いだそうとしていたのです。ところが、自分が考えていたものを言い表わすことができるまでに、またさらにほとんど十年近くかかってしまいました。適当な語は今日においてもまだ見つかっていません。(二二―二三頁)

この「対話」は、「東京帝国大学の手塚教授の来訪を機縁として一九五三年から五四年にかけて成立した」のはあるが、実際の対話の記録ではなく基本はあくまで創作であり、著者に好都合な要素が「日本人」へ適宜投入されている以上、読解の構えとして「問う人」の方も単純にハイデガーと同一視はできない。とはいえ、先の回顧的叙述はおおむね実相を反映していると考えられるだろう。そして実のところ、こういった言葉の問題については『存在と時間』の中でもすでに予防線のあるいは予言的に触れられていたのである。

以下の諸分析の内、用いられる表現のぎこちなさと「不恰好」については、こう注記を加えることが許されるだろう。存在するものについて物語りながら報告するのと、存在するものをその存在において把握するのは、別々のことである、と。後者の課題にとっては、たいてい語彙が欠けているばかりでなく、まずもって「文法」が欠けているのである。その水準において比類ない存在分析を試みたかつての探究を引き合いに出すことが許されるなら、プラトンの『パルメニ

デス』での存在論的な諸節やアリストテレスの『形而上学』第七卷第四章と、トゥッキュディデスがなす物語りの一節とを比べてみれば、彼らの哲学者たちによってギリシア人に強いられた言葉遣いが、およそ聞いたこともないようなものだったことがわかるだろう。

(S.38-39)

そこで『形而上学』第七卷第四章を覗いてみると、冒頭はこうなっている。「我々はお出発点において、我々の規定する実体のいくつかの意味を区別し、しかしてその一つが本質であると考えられたのであるゆえ、それについて考察しなければならぬ」(二九八頁)。ここで「本質」と意識されているギリシア語は、*to ti ty enwa*であり、敢えて直訳すれば「それがそうであったところのもの(what it has been)」のような形になる。定冠詞を付けることによって形容詞や動詞はもちろん関係詞句などさえも一つの抽象的な概念にしてしまえるギリシア語の力を極限まで活かしたこのような表現が、「強いられた言葉遣い」の典型と言えよう。実際、『存在と時間』でも同様の言い方、例えば *das Worauhin* などが頻繁に見られる。

これは「そこへと向かうその先」ということで、まさに本書の中核をなす「意味(Sinn)」の意味を規定するのに用いられている。「意味とは、予持・予視および予握によって構造化された企投の向かうその先であり、ここからして何かは何かとして理解できるようになるのである」(S.151)。確かに、ここでハイデガーは文字通り『形而上学』の言葉の「助け」によって存在の意味を究明しようとしていた、ように見える。

現存在の本質と可能性

しかしながら他方で『存在と時間』は、すでに多くの点で従来の形而上学的な言葉遣いに変革を引き起こしてもいた。例えば「現存在(Dasein)」およびこれと対を成してきた「本質(Wesen)」からしてそうである。これらは伝統的存在論の最も基本的な概念である *existentia* と *essentia* のドイツ語訳で、「どんな物であれ必ず本質に由来するが、それはいつも現存在しているとは限らない」といった仕方で捉えられてきた。机など道具は先取りされた本質に即して製作されるし、三葉虫の本質は体の構

造によって定義されるがそれはもはや現存在していない。しかしハイデガーは「現存在」を、存在が現れて理解されている現場としての私たち自身を名指すのに限定し、またその存在の様式を「Existenz実存」と呼ぶ。すなわち「現存在の「本質」はその実存にある」(S.42)。ここでは当然「本質」の内実も変化していわば動詞的になっているのだが、このトリッキーな命題をサルトルは「実存は本質に先立つ」と言い換えて、謂わゆる実存主義を興隆させた。しかしハイデガーによれば彼は依然として、実存も本質も「形而上学の意味に受け取っている」(『ヒューマニズム』について、五〇頁)。そして同様の變動は、アリストテレスの *dynameis* に由来しつつも実存の根本構造へと解釈し直された「可能性Möglichkeit」という語にも生じており、一九四六年のハイデガーはさらに進んで、ドイツ語固有の成り立ちを駆使しながら形而上学の言葉を内側から揺るがそうとしている。

好む働き【Mögen】のもつ成就させる能力【Vermögen】こそは、その「力によって」なんらかのものが本来的に存在することを成就させるゆえんのものなのである。

このような成就させる能力が、本来的に「可能にするもの」である。つまり、「可能にするもの」とは、その本質が好むことのうちに存するものことにほかならない。「……」私が「可能なものの静かな力」について語るとき、私は、たんに表象されたポシビリタース「可能性」に属するポシビレ「可能ナモノ」のことを考えているのではなく、また、エクシステンティア「現存在」というアークトゥス「現実性」のエッセンティア「本質」としてのポテンティア「可能性」のことを考えているのでもなく、むしろ、存在そのものものを考えているのである。その存在は、好みつつ、思索に関して、そしてそのようにして人間の本質に関して、そしてつまりは存在への人間の関わりに関して、成就させる働きを行うのである。(同前書、二四―二五頁)

覆いの取り除きとしての真理

しかし『存在と時間』が哲学・形而上学にもたらした刷新の中でもとりわけ重要で多くの議論を呼んできたのが、「真理」というやはり根本的な言葉の捉え直しであ

る。

第四四節においてハイデガーはまず、「真理の本質の伝統的な把握と、その初歩的な定義に関する見解」を特徴づけている。すなわち、「①真理の「在りか」は陳述(判断)である。②真理の本質は、判断とその対象との「一致」の内に潜んでいる。③論理学の父であるアリストテレスは、真理をその根源的な在りかとしての判断の内に割り当てると共に、同じく「一致」としての真理の定義を広めた」(S.214)。陳述(判断)は「命題」や単に「文」とも呼ばれ、繫辞を介した主語と述語の結合、またはその分離としての否定、という形を持った言語表現であり、繫辞とは印欧語ならSeinやIeのような「存在」動詞の変化形、日本語では「が」「は」などの助詞、と差し当たって考えられる。確かにアリストテレスは、『命題論』や『形而上学』など各所でこのようにも読める議論を展開している。例えば、語としての「クジラ」も「魚」もそれ自体では真でも偽でもない。「クジラは魚(である)」という「結合」や、その否定つまりクジラと魚の分離としての「クジラは魚でない」といった陳述がなされるとき、初めて真偽が問題になる。

しかしハイデガーは、判断や命題がまず自立した単位として存在しそれが後から対象と比較される、という見方は不適切であり、陳述とそれを構成している語は初めから「存在しているもの自体」に向かっている、と言う。判断は、周囲の世界の不明な広がりの中から特定の存在者を取り出して、その在り方を見えるようにしたり、他の見えるものを覆い隠したりする。「陳述が真であるとは、その陳述が存在者をその存在者自身に即して露呈させる〔entdecken〕と、こうことを意味する」(S.218)。

こうした把握の基礎には、真理を意味するギリシア語 *wirbena*(アレーティア)が、忘却や隠れを意味する *wifon* に否定の接頭辞 α が付いたものだという事実があり、ロゴスないし言葉は「隠れから脱させる」「露呈させる」という働きの際立った、しかし唯一ではない担い手なのである。と同時にこうした露呈は、それが可能かつ必然となる場がなければそもそも生じることもない。そして存在者とその存在が現れるこの「開け」こそ、他でもない私たち現存在なのだとされる。「この開示性とともに、またこの開示性によって、露呈は存在し、したがって現存在の開示性をもって初めて、真理の最も根源的な現象

が成就されるのである」(S220-221)。

実際、「クジラは魚でない」という判断と事実との「一致」が確かめられるのは(まさにアリストテレスがしたように)実際に解剖して、エラがなく肺がある、卵ではなく胎児を産む、といった事態が私たちに開示される時である。しかも、現存在の置かれた状況によっては「マッコウクジラは魚(である)」という文も真となりうる。それは、凶鑑やクイズなどで(ブランクトンを瀧し取って食べるヒゲクジラと対比して)ハクジラ類は魚やイカを追いかけ捕食する、という事実を「見えるようにする」ことが主眼となっているような場合である。これは助詞「は」の機能の問題でもあり、日本語文法学では「僕はウナギ」が例文として定番となっているが、これほど顯著ではなくとも陳述の露呈作用が、そのつど開示されている状況(事実的被投性)に依存しているということはどの言語でも変わらない。これが、「予持・予視および予握によって構造化された企投の向かうその先」という意味の構造を成す。

そして「シーラカンスはタイよりクジラに近い」と言くと、事はさらに複雑になってくる。条鰭類つまり放射

状の細い骨に膜を張ったヒレを持つ多くの魚と、中心の太い骨を肉と髯が取り巻くようになっていく肉鰭類とは約四億年前に分かれており、後者の系統からシーラカンスも陸上四肢動物も進化しているので、分岐の順序や時間経過および遺伝子配列の点で「シーラカンスは同じ魚のタイよりも哺乳類であるクジラに近い」のである。この陳述に関してはもはや単純に「一致としての」真偽を言うことはできず、むしろ「魚」や「近い」はそもそも何を意味するのかということが、さらには「分類する」という命題内には直接現れていない営みそのものの本質は何なのかということが、問いという形で露呈されるのである。そして仮に、理解の地平として現代の分岐分類を拒んで古典的な形態分類を採ると、今度はその基準が臓器の構造なのか大まかな外見なのかが決まできなくなり、「クジラは魚」はまた真ともなりうる。このように言葉の解釈はいつも他なる解釈の可能性を覆って見えなくする、つまり非真理を伴うのである。「現存在の事実に性には、閉鎖性と隠蔽性が属している。「現存在は真理の内存在している」という命題の完全な実存論的・存在論的な意味は、それと等根源的に「現存在は非真

理の内 で存在している」ということを共に言っている」
(S.222)。

真理に関する語りの真理

しかしここまで整理してきた所で、一つの素朴な疑問が生じてくる。すなわち、真理を巡るこうしたハイデガーの言葉自体は、果たして真理に関するどのような理解に基づいて読まれるべきなのだろうか、と。ここに、『存在と時間』の成功と途絶の一つの鍵があるように思われるのである。

彼はまず、自分の論述そのものが「事態との一致が問題となる判断(の連なり)」という伝統的で平均的な理解に従って読まれるということを、十分に予期している。それを示すのは次のような箇所である。

「根源的な真理は現存在の開示性である」と「現存在は等しく真理と非真理の内にある」というこの二つの命題は、真理現象の伝統的な解釈の地平の内部では、次の点が表示されるとき初めて完全に洞察されうるようになる。①

一致と解された真理は、開示性に由来していながらも一定の変様の途を経ている。②開示性という存在の仕方自身は、差し当たってはその派生的な変様が視野の内に入り、真理構造の理論的解明を導くにまで至る。
(S.223)

何よりも「存在」や「時間」がまずそうであったように、あらかじめ身近な、しかし非概念的で漠然とした理解がなければ、そもそも何かについて疑問や探求が生じることもない。『存在と時間』はこの「前存在論的な」理解の概念的把握を指すとされており(第八節など)、これは一見、従来の哲学や現象学が求めるものと大きく異なるところはない。当時の学者や一般教養層も、この入り口の構えに特段の違和がなかったからこそ、読み始めることができたに違いない。私たちは差し当たって、「現存在は真理の内 で存在している」といった陳述自体が周知の真理観と一致しているかどうかを問題にするし、「ハイデガーの真理論」に関する従来の議論もほとんど当然のようにそうしている(そしてそこにおける真理と非真理の曖昧さを後の国民社会主義への加担と結び付けたりもする)。

しかし彼としては、こうした伝統的・慣習的な理解を足掛かりにしつつ、それがどのように派生して来たのかを示すことによって、根源的な真理と時間性を「覆われた状態から見えるようにする」ことを企図していたのである。

当然のことながら、事態と一致している判断も「存在者の在り方を露呈させる」という働きを持っていないわけではない。生息域と外見を分類の地平としている共同現存在にとつて、「クジラは魚ではない」は真に驚くべき発見であった。しかしそれは、単なる知識として流布するにつれて「いつでも正しい命題」へと摩滅して行く。同じことが他ならぬ真理自身についても起こっており、真理の伝統的理解そのものが真理の根源を覆って見えなくしている、というわけである。それに対して『存在と時間』は、いわば「シーラカンスはタイよりクジラに近い」のような喚起力を持つ陳述を重ねることで、その秘められた次元へと誘っているのである。また、ここではもはや立ち入ることはできないが、真理および開示性一般は情態性すなわち気分や感情をも不可欠の契機としており、これこそが西洋の哲学・形而上学に対して最も

深く隠され続けてきた事柄だと言ってよい(第二九節、第六八節などを参照)。ハイデガーにとつて「アジアとの対話」が避けられないと思われた理由の一つはここにある。

ただ、「一致への期待を利用し充足させつつ、その可能性の条件である意味ないし地平の構造を露呈させて行く」というこの戦略は、「存在者↓存在↓存在理解↓現在の時間性↓根源的な時」と最後まで来たところで、或る深刻な困難にぶつかることが予想される。というのも、根源的な時そのものはもはや、理解されるために他の地平へと向けられることが必要でも可能でもないからである(そうでなければ無限後退に陥ってしまう)。したがって、根源的な時はその意味としての地平を自らへと再び統一しなければならぬ。あるいは、こうした純粋な運動を名付けるには時間とでも言うほかない。実際、この時期のハイデガーは「自己触発」というカントから借りた語をしばしば用いている。そしてさらにここへ、言語の使用や理解そのものもまた紛れもなく一つの時間的な現象である、という事実を加味するならば、全ては途方もなく錯綜してくる。第三篇「時間と存在」をなす言葉は根源的な時を、もはや表現したり指し示したりするの

ではなく、その場で自ら体現し露呈させる必要があったと考えられる。しかしそれはそもそも可能なことなのだろうか。「真理の本質は本質の真理である」や「言葉が言葉を言う」といった後期を代表するトートロジー的な表現は、この課題を別の仕方で引き継ごうとしているのであろう。

ありふれた言葉の欠かせなさど欠けたところ

ハイデガーは、自らの思索が体系などではなく「道」であることを常に強調していた。一九三〇年代半ば以降のその著作は、難解、逆に素朴、あるいは詩的、秘教的など様々な受け取られ方をしているが、いずれにせよもはや「学的」ではない。したがって、それについて何かを論じることとも極端に難しくなってくる。しかしながら、これらの言葉が当時あれほど真剣に聞かれ、そして今でも読まれ続けているのは、何よりもまずそれが『存在と時間』の著者によって発せられたからこそである。先のジャン・ポーフレを含め多くの人々は、後のハイデガーの言葉の中に「時間と存在」のヒントを探し求めずには

いられない。単に「内容」においてのみならず、こうした社会的でパフォーマンス的な意味においても、「形而上学」の言葉の助けを借りて途絶した『存在と時間』こそが、それとは別の思考を模索する後期ハイデガーを可能にしたのである。ウィトゲンシュタインの場合も似た面があるかもしれない。そしてこれはより一般的にも言いうることである。

そのつど固有で本来的な存在をひたすら「見えるようにさせる」言葉が、誰にとつていつどのように「可能かつ必要となるにしても、それは日々「事態との一致を旨とするありふれた言葉」を膨大に積み重ねているそのさ中のことではかありえないだろう。そしてまた、こうして生まれた特異な言葉の姿やその来し方・行く末を記録し伝えて行くためにも、それらを正しく記述する概念的な言語が必要となるに違いないのである。

ところで私たちの——ということとはつまりいま現に読まれているこの——言葉には古くから、何かにとつて「たいいてい語彙が欠けているばかりでなく、まずもつて「文法」が欠けている」という事態を表現するのによく知られた言い回しがある。すなわち「こころ余りてこ

とば足らず。』『古今集』仮名序において在原業平の歌がこう評されているわけだが、ここで言う「こころ」が単に個人の思いのみならず、言葉自体が意味しようとしているものをも含んでいることは言うまでもない。そして後代の注は例の一つとして次のような歌を挙げている。

月やあらぬ春や昔の春ならぬ

わが身ひとつはもとの身にして

ここには、存在と否定、時間、世界、運動、自己、そして言語と問い、という枢要な事柄がことごとく凝縮されている。それは果たして形而上学や哲学とどこまで重なり、どのくらい離れているのだろうか。ここで見え隠れしている余りとはいったい何なのか。こうして、言葉についての対話は続いて行く。

注

* 現在、『存在と時間』の邦訳は下のように多数があり、いずれも工夫を凝らした労作で決定版を選ぶことは難しい。本稿では原書のページ数だけを記しておいたが、各翻訳にも対応するページ番号が振られている。桑木務訳（岩波文庫全三巻、

一九六〇—一九六三年）、松尾啓吉訳（勁草書房全二巻（新装版）、二〇一五年）、細谷貞雄訳（ちくま学芸文庫全二巻、一九九四年）、原佑・渡邊二郎訳（中公クラシックス全三巻、二〇〇三年）、熊野純彦訳（岩波文庫全四巻（新訳版）、二〇一三年）、高田珠樹訳（作品社、二〇一三年）。中山元訳（光文社古典新訳文庫全八巻、二〇一五—二〇二〇年）、辻村公一／ハルトムート・ブッカー訳（有と時 ハイデッガー全集第二巻）創文社、一九九七年）。また、その他の書籍からの引用については、ブックガイドに挙げた邦訳を用い、その頁数を記したが、必要に応じて原語を【】内に付記した箇所がある（「」内は訳者の挿入）。

串田 純一（くした じゅんいち）

一九七八年生まれ、奈良県出身。

早稲田大学・慶應義塾大学ほか非常勤講師。哲学塾カント講師。

哲学・現象学。

東京大学教養学部卒業、東京大学大学院総合文化研究科修了、博士（学術）。

著書『ハイデガーと生き物の問題』（法政大学出版局、二〇一七年）。訳書 サイモン・クリッチリー／ライナー・シュールマン著、ステイヴン・レヴィン編『ハイデガー』『存在と時間』を読む』（法政大学出版局、二〇一七年）。共訳書 ギュンター・ファイガール『問いと答え——ハイデガーについて』（法政大学出版局、二〇一七年）、ロドルフ・ガシエ『脱構築の力——来日講演と論文』（月曜社、二〇二〇年）

15分で読む ハイデガーの途切れた時間と存在を引き継ぐ時間 ブックガイド

出版社	ISBN (978)	書名	著者名	本体価格	刊行
創文社・東京大学出版会		存在と時間*1 ハイデッガー全集*2	M・ハイデガー M. ハイデッガー	8000-11000	
ちくま学芸文庫	4480083524	「ヒューマニズム」について ——パリのジャン・ポーフレに宛てた書簡	マルティン・ハイデッガー著、渡邊二郎訳	1200	1997
平凡社	4582763584	言葉についての対話——日本人と問う人とのあいだの	M. ハイデッガー著、高田珠樹訳	品切れ	2000
理想社		真理の本質について プラトンの真理論(ハイデッガー選集11)	M・ハイデガー著、木場深定訳	品切れ	1971
平凡社	4582702774	アリストテレスの現象学的解釈——『存在と時間』への道	M. ハイデガー著、高田珠樹訳	品切れ	2008
平凡社ライブラリー	4582760705	形而上学入門	マルティン・ハイデッガー著、川原栄峰訳	1800	1994
平凡社ライブラリー	4582766455	芸術作品の根源	マルティン・ハイデッガー著、関口浩訳	品切れ	2008
平凡社ライブラリー	4582761795	ニーチェ I ——美と永遠回帰	マルティン・ハイデッガー著、細谷貞雄監訳、杉田泰一・輪田稔訳	1900	1997
平凡社ライブラリー	4582761849	ニーチェ II ——ヨーロッパのニヒリズム	マルティン・ハイデッガー著、細谷貞雄監訳、加藤登之男・船橋弘訳	1900	1997
講談社学術文庫	4065150108	技術とは何だろうか——三つの講演	マルティン・ハイデッガー著、森一郎編訳	720	2019
作品社	4861820687	現象学の根本問題	マルティン・ハイデッガー著、木田元監訳、平田裕之・迫田健一訳	6800	2010
河出書房新社	4309740256	ハイデガー —— 生誕120年、危機の時代の思索者(KAWADE道の手帖)	マルティン・ハイデッガー、高田珠樹、田崎英明、磯崎新ほか著	品切れ	2009
昭和堂	4812220078	ハイデガー事典	ハイデッガー・フォーラム編	10000	2021

出版社	ISBN (978)	書名	著者名	本体価格	刊行
法政大学出版局	4588150494	『存在と時間』講義——統合的解釈の試み	ジャン・グレーシュ著、杉村靖彦・松本直樹・重松健人・関根小織・鶴真一・伊原木大祐・川口茂雄訳	12000	2007
法政大学出版局	4588010590	ハイデガー『存在と時間』を読む	サイモン・クリッチリー／ライナー・シュールマン著、スティーヴン・レヴィン編、串田純一訳	4000	2017
白水社	4560098042	ジャック・デリダ講義録 ハイデガー——存在の問いと歴史	ジャック・デリダ著、亀井大輔・加藤恵介・長坂真澄訳	7300	2020
講談社現代新書	4062884372	ハイデガー『存在と時間』入門	轟孝夫	1350	2017
法政大学出版局	4588005343	ハイデガー——ドイツの生んだ巨匠とその時代	リュディガー・ザフランスキー著、山本尤訳	7300	1996
法政大学出版局	4588007835	ハイデガーと解釈学的哲学	オッター・ペゲラー著、伊藤徹監訳	4300	2003
法政大学出版局	4588010712	問いと答え——ハイデガーについて	ギュンター・フィガール著、齋藤元紀・陶久明日香・関口浩・渡辺和典監訳	4000	2017
創文社・講談社	4423170762	意味・真理・場所——ハイデガーの思惟の道*3	細川亮一	10000	1992
昭和堂	4812208182	ハイデガーの根本洞察——「時間と存在」の挫折と超克(電子書籍)	仲原孝	9500	2008
春風社	4861101823	世界内存在の解釈学——ハイデガー「心の哲学」と「言語哲学」	荒畑靖宏	品切れ	2009
東京大学出版会	4130101189	破壊と構築——ハイデガー哲学の二つの位相	門脇俊介	3500	2010
法政大学出版局	4588150647	存在の解釈学——ハイデガー『存在と時間』の構造・転回・反復	齋藤元紀	6000	2012
法政大学出版局	4588150838	ハイデガーと生き物の問題	串田純一	品切れ	2017
法政大学出版局	4588130250	ハイデガーと哲学の可能性——世界・時間・政治	森一郎	4200	2018
左右社	4865280845	ハイデッガーの超越論的な思索の研究——『存在と時間』から無の形而上学へ	丸山文隆	5000	2022

出版社	ISBN(978)	書名	著者名	本体価格	刊行
勁草書房	4326103362	ハイデガーと現代現象学 ——トピックで読む『存在と時間』	池田喬	3000	2024
岩波書店	上4003380512 下4003380529	告白(上・下)	聖アウグスティヌス 著、服部英次郎訳	上980 下840	1976
岩波書店	4000904131	ソピステス／ポリティコス (政治家)(プラトン全集3)	プラトン著、藤沢令 夫・水野有庸訳	品切れ	1976
講談社学術文庫	4061591165	形而上学	アリストテレス著、 岩崎勉訳	品切れ	1994
新潮社	4106208102	古今和歌集(新潮日本古典 集成 新装版)	奥村恆哉校注	3400	2017

*1 p. 12の注を参照。

*2 創文社閉業に伴い、東京大学出版会で既刊50冊をオンデマンド復刊。本体価格はオンデマンド版のもの。続巻も刊行予定。

*3 創文社閉業に伴い、講談社学芸アーカイブより創文社オンデマンド叢書として刊行。ISBNと刊行年は原書のもの、本体価格はオンデマンド版のもの。

一書店現場から一

バリューブックス・飯田光平氏インタビュー

聞き手 慶應義塾大学出版会・乙子智 白水社・小林圭司 ミネルヴァ書房・本橋弘行

今回は「書店現場から」の特別編として、21・7万人(2026年3月時点)の登録者数を誇る書籍系YouTubeチャンネル「積読チャンネル」を運営するバリューブックスの飯田光平さんに、会社のこと、飯田さんご自身のこと、チャンネルのことなど、さまざまなお伺いします。

1 バリューブックス事業概要と飯田さんの経歴

—まず貴社の事業目的・事業内容からお伺いしたいと思います。

飯田 バリューブックスのミッションは、「日本および世界中の人々が本を自由に読み、学び、楽しむことができる環境を整える」というものです。また、事業の根幹は、宅配による本の買取とAmazon等のプラットフォームでの販売になりますが、本にまつわるあらゆる事業を手掛けたと思っています。古書だけでなく新刊の販売、自社サイトでの販売、リアル店舗の運営、無印良品といった他業種への卸業や出版事業、「本だったノート」^(注)といった古紙再生事業も行ってい

ます。

— ミッションに違わぬ広範な事業内容ですね。HPを拝見すると、創業者の方が読み終わった本をインターネット販売し始めたのが事業のきっかけということですが、創業からはどれくらい経過しているのでしょうか？

飯田 最初は創業者が個人で始めた事業でしたが、会社として法人化したのは2007年です。2025年7月6日に創業18周年を迎えました。

— 続いて、飯田さんご自身についてのお話を伺いたいと思います。初めから書籍に関わるようなお仕事を志望されていたのですか？

飯田 はい。まずは大学生のときに渋谷のSHIBUYA PUBLISHING & BOOKSELLERSでインターンをしました。本は好きでしたけれど、進路先に出版社等はイメージできなかったんです。本の作り手になりたいという欲求はあまりなく、本を読んで楽しむ側だったので。インターンを経たあとは、書店のプロデュースや選書を行う東京の会社に就職しました。

— その後、現在のバリューブックスへ転職されるということですが、それはどういった経緯だったのでしょうか？

飯田 首都圏以外での生活を体験してみたかったというのがまずひとつです。また、働いていた会社は「いつかは独立か転職」というのが前提の環境だったので、3年勤めたところでどうすべ

きかを考えていました。そんなときにバリューブックス現社長の鳥居さんの知り合いという人が知己にしまして、その人から「一緒に見に行ってみない？」と誘われたのが直接のきっかけです。それまでもAmazonで古本を買うと頻繁にバリューブックスから届いていたので、「一体どんな会社なのだろう？」と気になって行ってみたところ、メンバーの人柄がよく一緒に働きたいと思える人たちだったこと、そして規模の大きな書店では本の扱い方がどうなるかを経験したかった、ということが動機としては大きいですね。

―バリューブックス転職後は、どういった業務をされていたのでしょうか？

飯田 主には、「選書業務」「編集業務」「マーケティング」ですが、先ほど挙げたバリューブックスの事業には一通り関わっていた感じですよ。現在、入社8年目ぐらいなのでですけど、積読チャンネルという事業を始めるまでは何でも屋に近いというか、本当にいろいろなやっていますね。例えば、ウェブ広告をゴリゴリ回して、いくらお金かけると何人新しいお客さんがやってくるのかみたいなこともやったり、メルマガを書いたり、通常ECで商品を買々と納品書が付いてくると思いますが、その裏が白紙ではもったいないので本のリコメンドを書いてみたりといったことを勝手に考えて始めたりしていました。

―それらの経験が現在の積読チャンネルの業務に活かされているということでしょうか？

飯田 よく言えばそうなのですが、自分の持っている適性や能力と呼ばれるようなものをバリューブックスという会社でどう発揮できるかを模索していたというのが正しいかもしれません

ん。先ほど「いろいろやってた」という言い方をしましたが、売上の9割以上は「宅配買取で本を仕入れてAmazonのプラットフォームで販売する」という、かなりシステムチックかつオートマティックなビジネスの流れが構築されていて、実態としては本屋というより物流会社の方が近いです。そのためか、この会社にはもともと本屋関係者だったり、いわゆる本好きのスタッフがあまりいません。むしろそこがこの会社の面白いところだと感じています。そういった型が定まった強力なロジックで駆動するビジネスモデルがあるなかで、自分は何をしようと考えた場合、「選書できます」というだけでは、バリューブックスではあまり価値を持たない。時々、選書業務もやりましたけれどそのビジネスを拡大していく会社でもないの、手当たり次第やっていたら幸運なことに積読チャンネルという事業と出会えました。

―飯田さんが積読チャンネルで取り上げる書籍は、チャンネルに合ったものを意識されると思うのですが、もともと飯田さんの好きな書籍のジャンルはどういったものなのでしょうか？

飯田 本主にオールジャンルですね。普段の読書の幅が狭いと選書はできないので、それこそ写真集、アート本、エッセイ、小説、ノンフィクション、科学、詩、短歌とか自己啓発など、けっこう雑食気味に読んでいます。ただ、積読チャンネルの動画ではアート系等は比較的扱うのが難しかったりするので、動画としては一定の傾向を持ってしまっているところはありますが、個人として好き嫌いは特にありません。実務的なエクセルが上手になるみたいな本や、お医者さんが読むような医学の専門書等は読みませんが。

あと本題と離れますが、僕はあまり知識を蓄えようと思って本を読んではいないですね。よく

他人から冗談気味に「本を読んでいるのにその内容を知らない」と言われるのですけど、「そこに因果関係はないでしょ」といつも思います。散歩が好きだけなのに、「なんであその景色覚えてないの?」と言われても困ります。別に見える景色を覚えようとして散歩しているわけではなく、気分が良くなるからやっているという事です。本を読んでもいけば、もちろん歴史の事象はいろいろ出てきますが、「へえー」とその場で思って、次のページを読むころにはもう忘れていたみたいな感じですね。

2 積読チャンネルについて

―それはよくわかるお話ですね。それでは、積読チャンネルを始められた経緯について伺っていききたいと思います。

飯田 チャンネル設立の目的はまず「自社サイトでの販売力の強化」です。これについてわかりやすいお話をしますと、Amazonの手数料はいきなりどんどん上がるのですよね。そうすると当然大打撃を受けますので、自社販売でやらないわけにはいかないということになる。しかし、Amazonや楽天があるなかで、田舎の中小企業のサイトにアクセスして会員登録する人なんているわけがないです。特に新刊は価格も同じです。とはいえ、頑張って自社サイトを使ってもらわなければならぬということとYouTubeでの販促を考えたということですね。「ゆる言語学ラジオ」や「コテンラジオ」といったPodcaster YouTubeの(注2)スポンサーを担当していた経験から、

YouTubeでの販促の知見を得ていたのもありました。

スポンサードについて前提からお話しすると、例えばスポーツブランドの場合、ラケットメーカーがプロテニスプレイヤーにラケットを提供するといったケースが一般的だと思います。「書籍の場合、プレイヤーって誰だろう？ 作家な気もするけど作家だけののだろうか？」と思ったときに、ゆる言語学ラジオやコンテンツラジオなどの本を使ってコンテンツを作っているプレイヤーを見つけたので、「ああ、これじゃないか」ということで、彼らが必要な書籍代は全部提供するというスポンサーを始めました。

また、スポンサードのさらにもうひとつ新しい技として生まれた特殊な例もあります。ゆる言語学ラジオさんが『言語オタクが友だちに700日間語り続けて引きずり込んだ言語沼』（あさ出版、以下『言語沼』）を刊行されたときに、当社で3200件くらい予約受付をしたのですが、書店としての全利益を彼らにあげました。つまり、1冊売っても1000冊売っても同じ。

—それはすごい話ですね！

飯田 「すごい」とよく言われるのですが、見方を変えると特殊なことではありません。バリューブックスは年間何億円もかけて広告を打っているのですが、これが古本業界じゃない方にはあまりピンとこないと思います。広告というと、本を売るためのお金に思われがちなのですが、うちは真逆で本を仕入れるための広告を年間数億円かけているのですよね。それこそ「本売る」と検索すると、バリューブックスのウェブ広告が出てくるような形です。中古業界って、仕入れが命なのですよね。仕入れないと売るものがない。新規の本を売りたい人を獲得するのに、

2000円とか3000円っていう広告単価をかけている。『言語沼』の事例で言うと、当然うちから本を予約するために3200人の方がアクセスしたのですが、彼らは本を買うために会員登録をしてくれるわけじゃないですか。その後に別の本を買ったり、本を売りに出してくれるかも知れない。

また、書籍の利益を取らないと言いましたが、極論赤字でもないのですよ。100円で買ったものを100円で売ったようなもの。利益はゼロですがコストもゼロに近いわけです。書店としてはおかしな話ですが、新規顧客を増やす広告事業として考えると、ほぼ0円で3200人が会員登録してくれる最高の結果なわけです。しかも、こうするとゆる言語学ラジオさんに「パリュブックスで『言語沼』を買ってくれてPRしてよ」とお願いする必要がないのです。なぜなら、彼らは他の書店よりパリュブックスでの購入だと書店利益分がもたらえて嬉しいのです。ので、何かお願いするのではなく、お互いにメリットがある座組さえ作れば、あとはお互いが全力で伸ばすだけなので。そういった仕組みができたのが大きかったですね。

—それでは続けて、チャンネルのコンセプトについてお伺いしたいと思います。

飯田 「①視聴者の積読を増やす」②面白い本を見つけたと思う人の情報源となる」③本を読む習慣のない人に読書の楽しさ(楽しみ方)を伝える」の3つですね。

—後ろの2つは非常にわかりやすいものですが、最初の「積読を増やす」というのが面白いですね。

飯田 そうですね。ただ、これは前提として、チャンネルを始めてから気が付いた自分の認識の

ズレというものがありません。というのも、私はもともと積読という言葉にネガティブなイメージを持っていません。よく「積読」という語をカウンター的な意味合いに捉えていただくことが多いのですが、私としては「ハッピーな状態」という認識だったので、ただただ、ストリートに良い意味で付けていたつもりでした。

―なるほど。面白いですね。続いてチャンネルのデザインについて伺います。積読チャンネルの動画は1時間ないしは1時間弱くらいの尺が多いかと思いますが、一方で販促動画としては短い方が良いというセオリーもあります。広告を数多く挟めるなどの利点もあるかと思いますが、この点については何か理由はあるのでしょうか？

飯田 いや、これも恥ずかしながら、単に本の紹介をしていたらそれぐらいになってしまったというのが正しいです。極論を言えば、最も良いコンテンツを作ることが大事なので1時間が最適というわけでもないです。1時間つまらない話をするのなら30分にした方がいいですし、なんとかセオリーは本質的にはあまり意味がないとは思っています。勝手な想像ですが、本作りにおいても何ページがベストみたいな会話はおそらくあまりしない気がするのですよね。スタイルというか、セオリーが仮にあったとしても、それに準拠せずあるべき内容を収めることに注力するし、そこを議論し合うと思います。きっとそれと同じなんじゃないかなと感じます。

―ありがたいですね。そして、現在の状況としては、チャンネル登録者数も閲覧数も順調に伸びていっている。

飯田 今年中に登録者数は30万人に達する見込みで、月額10000円の積読サロンも現在登録者数が1600人くらいになっています。今は軌道に乗っている気がしますね。伸びている実感はありますし、YouTubeの管理画面では出した動画の成績が定量的に表示されるので、それを見て何がいけなかったのか自分で考えて反省して、次に活かすということをやっています。だいたい動画を作るのに月300万くらいかかっている、YouTubeの広告収益も同じくらいでトントンですね。そこに実際売った本の利益がプラスされていく形です。ただ、どこまで行ってもこういうのは水商売で、過信しだすと落ちぶれていくのがYouTuberの常なので、あまり慢心せずコツコツ積み上げていこうという感覚ではありますね。

―チャンネル視聴者の性別や年代層はどういった構成なのでしょう？

飯田 男性が8割弱で、年代的には25〜34歳が最も多く、次いで35〜44歳なので、いわゆる働く男性が多いという感じですかね。良くも悪くも、堀元さん(註4)や僕と似た属性の方が見ているというイメージです。

―動画で取り上げる書籍の選定はどのようにされているのでしょうか？ お一人でされているのでしょうか？

飯田 本の選定については、基本的には版元ドットコムさんで新刊情報を見たり、版元さんからの新刊情報をチェックしています。僕がプレゼンをしている動画については、一人で本を選んで台本を作っていますので、その過程で他者が混じることはないですね。

—現在、登録者数とともに書籍の売上も伸びている。そういった状況のなかで、版元からの売り込みも
すくなく増えているのではないのでしょうか？

飯田 「紹介してもらえたら」ということで献本をいただくことは多いのですが、すごく不思議に感じるのが広告案件としてお話が来るのではないのですよね。誤解しないでいただきたいのが、「それが良くない」とか、「ちゃんとお金くださいよ」と言いたいのではなく、「PRしてください」と献本はいただくのに「PRしてください」と広告の話がないのはシンプルに不思議です。積読チャンネルに限らず、出版社はインフルエンサーへの広告を試みても良いのでは、とは思いますが。ただ、紙代も上がっているなか、広告費の捻出が大変というのもわかります。

—新刊情報で目星を付けた新刊を確認されると思いますが、内容を全て読まれるのでしょうか？

飯田 「これいいな」と思って買って見たけど、読了せずに途中でやめてしまうものもあります。読んだ本のうち、実際に動画で紹介するのは10%くらいです。紹介する書籍を読んだ後、6時間くらいで台本を作ります。個人的にはもうちょっと短くしたいのですが、それぐらいはかかっていますね。

—それはかなり早いですね！ 読みながらポイントを押さえていくイメージでしょうか？

飯田 それはそうですね。完成図をイメージしながら読んでいます。

—選書をされる際、「この本いけそうだな」と思う要素がどういったものなのか非常に興味がありま

す。タイトルや装丁など最初に目に付く箇所等いろいろあるかと思いますが。

飯田 そうですね。タイトルとか装丁、それこそ出版社もすごく意識しています。以前、積読チャンネルで紹介した書籍のなかに『崖っぷちの老舗パレエ団に密着取材したらヤバかった』(新潮社)というYouTuberが書いたノンフィクションがあります。新潮社さんがYouTuberの本を出して、しかもタイトルに「密着取材したらやばかった」と入っていると、ちょっと気になって手を出したりします。こうした「らしくないもの」を刊行する際、きっと社内で超えなきゃいけないハードルを超えているはずですよ。そのハードルを超えてきたということは、それだけの強度を持っていることは想像に難くないです。実際にこの本は、YouTuberの本なのに、その名前が一切書名や表紙に載っていません。通常はYouTuberのファンに買ってもらいたいでチャンネル名を載せるのですが、載せていないということは「ファンブックにしない」気概が感じられて、格好良いと感じました。

—実際に動画コンテンツを作って、動画コンテンツが話題となることを重視されているのか、それとも伝えたい思いの方を重視されているのか。その辺の割合的にはいかがでしょうか？ 現状でも結構です、当初から変化していたらその変化について伺えればと思います。

飯田 動画が話題となるという言い方だとかかなり直接的ではあるのですが、言い換えれば視聴者に刺さるかどうかですね。読み終わってすぐ面白かったけど、動画にはできないと思って諦める本もいっぱいあります。一番わかりやすいのはミステリー小説ですが、普通の小説でもネタバ

レとは別の話として、読んでいるときの心地よさは動画では伝えられないですよ。つまり料理の美味しさを動画で伝えられるかという話に近く、その感触を動画で届けることは難しい。だから、積読チャンネルはノンフィクションを取り上げることが多いです。意外な事実というのはそれだけでわかりやすさがあるので。

―なるほど。非常に参考になりますね。動画の収録はどのようにされているのでしょうか？

飯田 池袋にゆる学徒カフェ^(注5)というカフェがあって、そこに併設されたスタジオブースで収録しています。月2回程度ここへ行って、朝から晩までひたすら収録します。最後の収録にもなると、比較的頭を使わないように企画ものを撮ったりしています。

―具体的に人文会会員社の本を取り上げたときの反響についても伺いたいのですが、ひとつの例として青土社の『なぜ私たちは燃え尽きてしまうのか』^(注6)などはいかがでしょうか？

飯田 この本はだいぶ売れました。二本立てで一冊を紹介するという回ではあったのですが、よく再生もされていますし、売上も今(2025年12月中旬時点)では1047冊に達しています。

―すごいですね！ 動画で本を紹介するときに考えていること・気をつけていることについてはいかがでしょうか？

飯田 まず、「視聴者が気になる謎や提示を冒頭で行う」こと、それから「本の内容をただ喋るのではなく自身の意見や感想を入れ込む」こと、そして「面白い」という一点には価値はない

ので、視聴者の人生と交差する視点を留意する」ことですね。

—3つ目の「面白い」という一点には価値がない」というのが興味深いです。

飯田 最初は面白い本を見つけたい人の情報源になろうと思っていたのですが、常日頃面白い本を読みたいと思っている人は、あまりいません。いくらでも面白いものが世の中には溢れていますので、嫌な言い方をすると「映画見放題のNetflixより高い価格の本をなぜ買うのか」という話になると思うですね。見たいドラマや映画、あるいはYouTube動画が溜まっているなかで、ただ「この本は面白いですよ」と言っても意味がない。その「面白い」の先の「必要だから読む」というところを持っていかねなければならない、ということ意識しています。

例えば、早川書房さんの『ここはすべての夜明けまえ』は近未来SFなのですが、そのまま「近未来SFの本だよ」と伝えても、そこに興味ある人は少数派です。ただ、「家族との愛って呪いなのかもしれない」という内容だと紹介すると、「なら私の人生に関係ある」という人が増えてくる。そうした意味で、先ほどの青土社さんの『なぜ私たちは燃え尽きてしまうのか』が売れたのは、この本のテーマを強く実感する人がわかりやすく多かった。

—積読チャンネルをやってみてわかったこと・気がついたことはどついったことでしょうか？

飯田 普段から本を読む人は普段から本屋に行く人ではないことです。リアル書店で面陳されている本を紹介しても、ほとんどの動画の視聴者は知らない。僕も最初はあまり知られていない本を発掘しようという心意気でやっていますが、書店で平置きされている本もみなさん知りませ

ん。例えば、2024年の本屋大賞を取った『成瀬は天下を取りに行く』（新潮社）も積読チャンネル視聴者の1%も読んでいないと思います。知り合いの版元の方も「この本はもともと売っていたから本屋大賞をとっても意味がない」と思っていたのに、受賞で多くの人が知ることになったのを知って、自分が傲っていたことに気がついた」と言っていました。本屋業界から見えている景色とそうじゃないところから見えている景色って、本当にびっくりするぐらい違うのだと思います。

3 出版社にできること

—非常に身につまされるお話です。出版社からできること、あるいは情報提供の仕方はどういったものが良いでしょうか？

飯田 まず是新刊の情報ですね。本当は書籍の発売日付近で動画をアップしたいと考えています。動画の収録がほしい公開日の2ヶ月ぐらい前なので、確定情報ではないとしてもゲラなどをお願いいただけると助かります。もちろん献本もありがたいですが、タダではありませんので、まずは新刊の情報を、そしてチャンネルと合いそうな本があったら早めにゲラなどをご提供いただければと思います。

また、積読チャンネルで紹介した書籍について、動画のサムネイルやスクリーンショットは、リアル書店のPOPなどで好きに使っていただいて結構です。基本的に、積読チャンネルを見

て該当の本を知った人はそのままバリューブックスで買ってくださいるので、パイの取り合いにはならないと考えています。リアル書店でPOPを見て、「へえ、YouTubeがこんな本を紹介しているんだ」ということで購入につながれば、その書店にとってもいいことですし、積読チャンネルにとっても宣伝になりますので。正直に言えば、斜陽産業のなかでパイの取り合いをしても埒がないので、なんとか読者を増やさないと先がないと考えています。

—確実に動画で取り上げていただきたいと考えたら、やはり先ほどお話に出た広告ということになるのでしょうか？

飯田 確実に紹介する方法はあるかと問われれば、広告ということにはなりません。ただ、広告案件を増やしたいと強く思っているわけではありません。例えば、広告の打診があったとしても、積読チャンネルと合わない本であれば断ります。良くも悪くもバリューブックス、あるいは僕という個人が立ったチャンネルなので、単純に面白いと思えたものでないと紹介できません。

ですので、遊園地のファストパスに近いイメージです。広告案件を受けて紹介する本は、本来広告費をもらってなくても紹介する可能性の高い本です。ただ、それが公開されるのは2年後なのか3年後なのか、もしくは他の本に押しつぶされて公開できないかもしれない。そこを確実に公開するというのが広告という形です。また、普通のインフルエンサー広告と違って、うちは大くさん仕入れて販売します。つまり広告発注をした時点で版元さんは一定の売上が確定するんですよ。そこが一般のマーケティング広告と違うところで、紹介するだけで終わりじゃなく、たくさん本も売ります。

―他に何か出版社に伝えておきたいことはありますか？

飯田 毎回、紹介する本の各版元さんに聞くこととして、どれくらい返品が起きたら嫌なのか、ということがありますね。こちらも版元さんに迷惑をかけたわけではないのですが、たくさん仕入れておくと反響が大きくなったときに対応できません。もちろん返品は基本的に推奨されないという認識はあるのですが、例えば200冊を仕入れて100冊が売れて、残り100冊が返品となった場合、これは総合的に嬉しいことなのか、嬉しくないことなのか分からない。実際、版元さんとしてもケースバイケースのようで、発注数はいつも悩みますね。

―普段扱っている商品にも左右されるかもしれません。例えば、専門書の版元の方が一般書の版元よりも、返品が出ることを嫌がる傾向はあると思います。

飯田 そうですね。版元さんの規模でも全く話が違ったりはしますね。例えば、うちは全てオンライン在庫なので、返品があったとしても大抵の場合は綺麗な状態をキープしているのですが、「であれば大丈夫」という版元さんであれば、状態とは関係なく「返品されたものは必ず検品フローに入るので状態は関係ない」というケースもあります。

とはいえ、紹介する本は必ず200冊くらいは売れるので、うちとしては買い切りでもいいのです。でも、てっきり喜ばれると思って「買い切りでもいいですよ」とお伝えしても、嫌がられるケースもままあります。特に大手の版元さんでは、既存の出来上がったフローがあるので、買切だと別のフローにしなければならなくなり、営業担当が倉庫に直接連絡したりする必要が出

るなど敬遠される。また、うちは古本も販売しているので、「そんな会社に卸したくない」と言われるケースも稀にですがあります。

あと、パリュールブックスの何が特殊なのかがわかってきたのは最近で、版元さんのやりとりでもお互いよくわかっていないことがあります。例えば、「ファックスで発注してほしい」と言われるのですが、うちはファックスがないのです。とある版元さんの本ですごく売れたのですが、残念ながら在庫切れと言われたので、「在庫が復活したらメールで連絡してほしい」と伝えたら、「注文窓口の担当者はメールアドレスを持っていないから、メールで伝えることができない」と言われました。「じゃあ、毎日電話すればいいってことですか」と聞いたら、「そうなりますね」という返事でした。そうしたときに、たまたまその本の編集者からDMをいただいたので、「重版が決まったら教えてもらっていいですか」と聞いて対応していただけました。かつ、発注方法がファックスだと困ると相談したら、特例的にその方が対応していただきました。お手間をかけるのは申し訳ないと思いつつ、ファックスが前提だと動きにくい、というのも弊社の実情です。

—そうですね。この業界ではファックスは現役です。「ファックスを送ったのですが、届いていますか」という確認の電話が来たりします。

飯田 もうひとつ特殊な例で言うと、『政治学者、PTA会長になる』（毎日新聞出版）という書籍を紹介したときに出版社の担当者の方に「ノンフィクションとして紹介してくれてありがとうございます」と言われたのですが、僕は最初その意味がわかりませんでした。「どういう意味ですか」と聞いたところ、「書店だと教育の棚に置かれるんです」と言われて、初めてうちには棚の

概念がないということに気がつきました。でも、普通は棚の概念があって、出版社の営業さんもどの棚に置かれるかに注意を払っています。そして、うちに棚の概念がないことをお互いわからないまま会話をすると食い違いが起きたりする。「普通じゃないんだ」ということを最近やっと学び始めています。

4 「これから目標について」

—先ほど、リアル書店とは競合することはないというお話がありました。今後どのような関わりを考えていますか？

飯田 実際にビジネスモデルとしてあまり食い合っていない気がしています。「バイの取り合いとか小さなことを考えていちやダメだよね」ということもそうですし、Amazonとは取り合っている感覚がありますが、リアル書店とはシンプルに取り合っていない。

また、これまで何件か帯コメントをやらせていただいているのですが、本によっては報奨金が設定されているものもあって、それを「うちが出しましょうか」と版元さんに持ちかけたことがあります。いろんな書店で積読チャンネルと書かれた帯が広がることは、視聴者獲得に寄与するので、「じゃあ僕の帯コメントが載った本について、報奨金を出すから全国の書店でバリバリ売りますようよ」と提案してみました。でも、版元さんからしたら、「他社に報奨金を出してもらうのに、どんな社内フローを通せばいいのか」ということで、それは立ち消えました。先ほどの



インタビュー近影

ゆる言語学ラジオさんに書店利益を渡すこともそうですが、既存の書店ビジネスと違う軸でいろいろやりたがるという特性は、会社にも僕にもあるかもしれないですね。

—また、積読チャンネルの動画を拝見すると、新しく始めようとしていることとして、出版社を立ち上げようというお話もされていますね。

飯田 はい。遅々とした動きではありますが出版事業もやりたいですね。わかりやすいのが、積読チャンネルで『螺旋じかけの海』という全5巻の漫画を紹介して、2000セットが売れました。これだけ売れた理由として、この作品はオリジナル漫画なので多分Amazonで売ってないことが大きかったと分析しました。それならもう「自分たちがメーカーにもならなきゃ」ということです。

あと、これは本当にまだ構想段階ですけど、取次もやりたいですね。埼玉に140万冊ぐらゐる倉庫を契約したのですが、先ほどの「本を何冊仕入れとけばいいか」という話も、うちが飯元さんの倉庫になっていれば、「そんなこと気にしなくていい」という話になります。

もともと、うちは物流会社に近いので、毎日3万冊の本が届いて、かつ毎日1万5000冊の本を発送する作業をしているので他の書店に送ることもできます。最初は独立系書店が多くなると思いますが、比較的中小の書店を対象とした取次もやりたいというのは、積読チャンネルとは別軸の話として社内出ていますね。

—ありがとうございます。貴社の既成概念にとられない柔軟な発想を伺うことができ非常に勉強になりました。また、厳しい状況にある産業のなかできちんと利益を出すための取り組みは、若い人材を取り込み、業界の活性化にとって不可欠であることを再認識しました。人文会としても貴社の活動に注目していきたいと思います。ぜひ今後ともよろしく願いたします。

注

- 注 1 <https://www.valuebooks.jp/endpoint/4435/> 参照
- 注 2 <https://yurugengo.com/> 参照
- 注 3 <https://coten.co.jp/services/cotentradio/> 参照
- 注 4 堀元見 株式会社pedantic代表取締役。積読チャンネルのパーソナリティも務める。
- 注 5 <https://yurugakuto.studio.site/> 参照
- 注 6 「#36 仕事がつらいのは、あなたが改造されたから。」
<https://youtu.be/-UOyARiBu0g?s=Cd1sLeM7hETjCesh>
- 注 7 https://youtu.be/GBP9pt_Kg-E?si=wuE442W3UT6T13

積読チャンネルで扱われた人文会会員社書籍リスト

書名欄の▶は、紹介動画のタイトル、公開日、再生回数(2026年3月25日時点)

書名	版元名
『増補 母性愛神話の罨』 ▶ 保育園のヤバすぎる構造を暴露します。 2026/1/26 35.8万回	日本評論社
『自己決定の落とし穴』 ▶ 自己責任はなぜ幻想なのか？ 2026/1/5 34.9万回	筑摩書房
『差別はたいてい悪意のない人がする：見えない排除に気づくための10章』 ▶ あなたの発言、差別です。 2025/8/18 36.8万回	大月書店
『香川にモスクができるまで：在日ムスリム奮闘記』 ▶ 情報量が多すぎる本『香川にモスクができるまで』 2025/6/9 10.4万回	晶文社
『町の本屋はいかにしてつぶれてきたか：知られざる戦後書店抗争史』 ▶ 【削除覚悟】本屋が潰れる理由を暴露します 2025/6/2 47.6万回	平凡社
『恥と運命の倫理学：道徳を乗り越えるためのギリシア古典講義』 ▶ 道徳の授業がつまらないのは、あの哲学者のせい。 2025/3/24 30.6万回	慶應義塾大学 出版会
『中世ヨーロッパ：ファクトとフィクション』 ▶ 中世ヨーロッパはなぜウソだらけなのか？ 2025/3/17 25.1万回	平凡社
『貧乏人の経済学：もういちど貧困問題を根っこから考える』 ▶ 人生が変わった読書体験を語ろう！ 2025/2/10 20.4万回	みずす書房
『ヤンキーと地元：解体屋、風俗経営者、ヤミ業者になった沖縄の若者たち』 ▶ 社会学者が暴走族に10年取材し続けると…？ 2025/2/3 18.6万回	筑摩書房
『いなくなっていない父』 ▶ 積み始めたばかりの「積み立て本」を紹介するぜ！！ 2024/12/2 10.2万回	晶文社
『アメリカは自己啓発本でできている：ベストセラーからひもとく』 ▶ 自己啓発書の歴史が意外すぎる【福沢諭吉も書いてた】 2024/11/25 25.0万回 ▶ この本オススメだよ！読んでないけど！！！！ 2024/8/19 9.9万回	平凡社
『サッカー・グラニーズ：ボールを蹴って人生を切り開いた南アフリカのおばあちゃんたちの物語』 ▶ 泣きながら読み、人生が変わる。最高のノンフィクションを紹介します。 2024/11/8 11.0万回	平凡社
『ハヤブサを盗んだ男：野鳥闇取引に隠されたドラマ』 ▶ ハヤブサ泥棒のドラマがすごい。闇取引の恐ろしさも、捜査官とのバトルも。 2024/9/23 13.0万回	紀伊國屋書店

書名	版元名
『見えないスポーツ図鑑』 ▶【研究者の結論】野球の本質はストッキングで分かる。2024/8/30 10.5万回	晶文社
『男はなぜ孤独死するのか：男たちの成功の代償』 ▶この本オススメだよ！読んでないけど！！！！ 2024/8/19 9.9万回	晶文社
『なぜ私たちは燃え尽きてしまうのか：バーンアウト文化を終わらせるためにできること』 ▶「仕事ができない」はなぜ最高の悪口なのか？ 2024/7/22 49.3万回 ▶仕事がつらいのは、あなたが改造されたから。 2024/7/19 57.6万回	青土社
『北海道犬旅サバイバル』 ▶サバイバル登山家の、情けなくてカッコいい物語【北海道犬旅サバイバル】 2024/6/28 9.3万回	みすず書房
『政治家の酒癖：世界を動かしてきた酒飲みたち』 ▶【酔って核を落とす】政治家たちの最悪な飲み会【アルハラ三昧】 2024/6/10 17.7万回	平凡社
『えーえんとくちから』 ▶就職しなかった人に刺さる短歌。「ふつう」を問い直す傑作歌集『えーえんとくちから』 2024/5/6 9.5万回	筑摩書房
『本屋、はじめました 増補版』 ▶【まず150万円払う】本屋を開業しなくなったなら見る動画【発注しても本は来ない】 2024/4/22 22.5万回	筑摩書房
『絵本のなかの動物はなぜ一列に歩いているのか：空間の絵本学』 ▶【空間の絵本学】専門家が絵本をガチ考察したら衝撃の結果に… 2024/4/1 13.3万回	勁草書房
『不自然な自然の恵み：7つの天然素材をめぐる奇妙な冒険』 ▶本好きは表紙を見るだけで1時間喋れるらしい……。 2024/3/18 9.8万回	みすず書房
『キツネを飼いならす：知られざる生物学者と驚くべき家畜化実験の物語』 ▶実は読んでない本を当てる！読書エアバトル！ 2024/3/4 7.0万回	青土社
『きのこのなぐさめ』 ▶実は読んでない本を当てる！読書エアバトル！ 2024/3/4 7.0万回	みすず書房
『ガンジーの実像』 ▶実は読んでない本を当てる！読書エアバトル！ 2024/3/4 7.0万回	白水社

※上記書籍のバリューボックスでの販売実績は下記にて確認ができます。

「本屋がYouTubeで売っている本のデータを全部公開します」

<https://note.com/kyurikko/n/ne40ca2846949>

出版文化の発展に寄与できる図書館、図書館員とは

—— 塩尻市立図書館の取り組みから考えてみる

北澤 梨絵子（塩尻市立図書館）

はじめに

筆者には、心に残り続ける出版人の言葉があります。どちらも図書館で働き始めて日が浅い頃に聴講した講演会でのものです。

ひとつは「図書館には地域の読書環境を整えるという重要な役割を担ってほしい」という言葉、もうひとつは「良書をつくれれば図書館で買ってくれると信じている」という言葉。

このような本の作り手側の期待にどこまで応えられているでしょうか。10年以上経つ今も、頭の片隅にあり続

ける問いです。

塩尻市立図書館は、貸出数ではなく、利用者を増やすことを職員の共通認識として、基本的なサービスとともに対象を異にする企画やテーマ展示などを数多く行っています。市内に本店がある4つの書店との読書推進を目的とした連携も15年ほど続いています。また、出版社や印刷会社、製本会社などの協力を得た企画も毎年実施しています。本稿では、「信州しおじり本の寺子屋」事業をはじめとする、書店や、本を生み出している方々との連携・協力等に関する実践を中心に塩尻市立図書館での取り組みを紹介します。そして、そこから考えたことをまとめてみたいと思います。

塩尻市／塩尻市立図書館の概要

ワイン、漆器、短歌、街道、宿場などといった誇れる特産品、地域資源を持つ塩尻市は、長野県のほぼ中央に位置し、約6万5千人が暮らしています。地域の約7割を森林が占める緑豊かな田園都市には、本館・分館あわせて9つの図書館が設置されています。「世界が広がり未来がひらける知の交流拠点」として「居心地がよく、ワクワクし、また来たくなる」図書館づくりを全館で進めています。蔵書数はあわせて約60万冊。2024年度は本館が工事のために約半年間休館していましたが、それでも総利用人数13万7434人、個人貸出数54万3022冊と多くの方に利用いただきました。そんな塩尻市立図書館は、2026年に開館55周年を迎えます。

筆者が勤める本館は、塩尻駅から商店街方面へ歩くこと5分強、中心市街地に立地する複合施設、塩尻市民交流センター(愛称えんぱーく)内の1・2階にあります。2010年7月に開館した図書館を核とする地上

5階・地下1階建てのこの施設には、子育て支援センター、市の商工部門などが入居し、「図書館」「子育て・青少年」「シニア」「ビジネス」「市民活動」という5つの分野がそれぞれ機能の融合を図ることでサービスの提供を行っています。全体的にゆったりとした公園のような雰囲気で、4つの吹き抜けを有し、壁柱と呼んでいる特殊な構造体で支えられているのも特徴のひとつです。

「章の冒頭で塩尻市の誇れるものを挙げましたが、本館では、「ワインコーナー」「漆器コーナー」といった名前をつけて、それぞれに関連する資料(本だけでなく雑誌、視聴覚資料、冊子やチラシなども含む)を重点的に集め、1か所にまとめた棚をつくっています。

いわゆる「郷土資料」と呼ばれる地域のことが書かれた資料はもちろんですが、地域の誇りを資源と捉え、資料の収集・提供・保存を重点的に行うこの試みは、塩尻市立図書館のコレクションの強化、近隣の図書館や書店との差別化につながっています。各コーナーは、その分野のことが知りたいという方々に活用されているだけでなく、さまざまな目的を持った施設の来訪者に塩尻市の特色を知っていただく、情報発信の場にもなっています。



「ワインコーナー」には資料だけでなく、市内ワイナリーの紹介やワイン瓶なども置いている。

本館だけでなく、学校区ごとに設置されている各分館でも、立地する地区の特色を蔵書に反映させています。

古田晁文庫

コーナーの中でも声を大にしてお伝えしたい一押しが、『ちくま文庫』『ちくま学芸文庫』『ちくま新書』『ちく

まプリマー新書』を中心に構成された「古田晁文庫」です。シリーズがずらっと並ぶ姿は圧巻です。

古田晁は、現在の塩尻市北小野地区(旧筑摩地村)の生まれで、1940年に筑摩書房を創業した人物です。古田は筑摩地村だった時代から筑摩書房の出版物を出身地の図書館に寄贈していて、ありがたいことに現在もお孫さんが遺志を継ぐ形で、塩尻市への寄贈が続いています。そのため、全国有数の筑摩書房の出版物を有する図書館となっています(2026年2月現在、約2万1千点以上が当館ホームページ上で検索可能)。

単行本や全集は見つけやすさを優先し、コーナーではなく、小説なら小説の棚に置いています。背に決まった目印を貼ることで筑摩書房の本だということが一目でわかるようにしています。

古田家への感謝と筑摩書房への敬意を込めた「古田晁文庫」、そして筑摩書房の出版物は、後世につないでいかねばならない塩尻市立図書館の最も重要なコレクションです。

古田晁記念館

あわせて紹介したいのが古田の生まれた地区にある「古田晁記念館」です。古田家生家の庭と土蔵を塩尻市にご寄付いただいたところから1996年の開館に至りました。中野重治や宮本百合子をはじめとする数々の作家や学者が訪れて語らったという土蔵の2階は当時の雰囲気そのままに、1階は展示室として古田所縁の品々をご覧ください。古田宛の書簡は贈り物へのお礼や金策の願いなど、古田と作家たちの密な関係や古田の手柄が垣間見られる貴重なものです。

記念館の館長は歴代の図書館長が兼ねて務めています。1998年から年に一度開催を続けている「古田晁記念館文学サロン」では、筑摩書房や古田晁にまつわる講演会などを実施しています。古田を偲ぶ場としても、また、出版について考える場としても重要な事業です。ここ数年は、太宰治賞受賞者をお招きした講演会や、古田の命日である10月30日に墓参ツアーを開催し、長野県内外から参加いただいています。



「古田晁文庫」には古田晁の年譜や古田晁記念館の紹介も掲示。古田晁や筑摩書房について書かれた本などもあわせて置いている。記念館は県外からの来館も多い。

2026年は古田晁生誕120年、記念館開館30周年が重なる年でもあります。熱い思いで作家の面倒を見、良書を出し続けた塩尻市を代表する偉人を、より一層知っていただける年にできればと思っています。ぜひ一度お出かけください。



「哲学書房コーナー」では、哲学書房と中野幹隆氏の略歴を紹介するとともに、刊行年表を設置。一部、中野氏の手がけられた朝日出版社の本も置いている。

哲学書房

塩尻市立図書館には、もうひとつ大事にしている出版社があります。塩尻市生まれの中野幹隆氏が1986年に東京で創業した「哲学書房」です。2010年、当時の社長であった中野容子氏（幹隆氏の妻）により出版物のほとんどを当館に寄贈いただきました。同年と2016年には哲学書房を知っていただく展示を実施、2017年には月曜社の小林浩氏に「出版人 中野幹隆と哲学書房の魅力」と題して、講演いただきました。講演会には中野氏の知人も多く参加されていて、「難しい

ことをやってるとは思っていたが、今日の話を聞いて、やっとな仕事のすごさが理解できた」といった感想を話されていたのが印象的でした。寄贈いただいた出版物は古田畠文庫の隣に「哲学書房コーナー」として設置しています。

信州しおじり本の寺子屋

続いて取り上げたい重要事業が、「本の可能性を考えたい」をテーマに掲げ2012年に開講した「信州しおじり本の寺子屋」（以下本の寺子屋）です。第1回目のパンフレットではその主旨を次のように紹介しています。

「信州しおじり本の寺子屋」は、塩尻市立図書館が中心となって、生涯読書を推進するために設置するものです。

原型は、地域の人々の生涯学習と出版業界人の研修の場として、1995（平成7）年に今井書店グループが鳥取県米子市に開設した「本の学校」にあります。

本事業は、その精神を受け継ぐと共に、塩尻市が出版王国と言われる信州に所在し、日本の出版文化に偉大な軌跡を残した筑摩書房の創設者、古田晁の生誕の地であることに鑑み、講演会、講座等のさまざまな事業を通じて、「本」の可能性を考える機会を広く提供するものです。

本は、著者から出版社、書店を経て、読者へと届けられます。一方、図書館は、保存という目的をもって、多種多様な本を収集・提供することで、出版文化の一翼を担っています。

活字離れと言われる昨今の状況に対して、著者、出版社、書店、図書館などが連携して本の魅力を発信し、出版文化の未来に寄与するために、図書館を「本の寺子屋」とし、読者も含めてここに集う人々の知恵の交流を促すことで、地方発の文化の創造と発信に挑戦したいと考えております。

主旨からも強い思いを持って実施していることがおわかりいただけるかと思えます。講演会を中心に、14年続く塩尻市立図書館を代表するこの事業がはじまるにあ

たっては、次のような物語がありました。

本館が今の場所に移転する6年前、2004年に市民から塩尻市へ「市立図書館の在り方ワーキンググループ提言書」としてまとめられた提言が出されています。公募で集まった21人の市民によるもので、その目的には「市立図書館の現在抱えている問題点を探り、機能の向上や将来の在り方を検討し(中略)市民のための図書館を考えるため」と書かれています。提言書の「館長の在り方」という項目には次のような一文があります。「館長は読書が好きであると共に司書資格のある幅広い知識や経験を持つ人であることが望まれます。(中略)これからの図書館を運営する館長は、図書館運営に情熱を持って意欲的に取りくむ人であるとともに、自分なりの識見や抱負を持って、ことに当たる館長が望ましいです。」

このような市民の強い要望を受けて、塩尻市はまさに提言どおりの館長経験もある人物を招聘することになります。それが2007年に着任された内野安彦氏です。内野氏は縁もゆかりもなかった塩尻市で、その経験と知識、手腕を発揮し、着実に、新館に向けた準備計画と職員の育成を進めていきます。そんな中、当時手薄だった

郷土資料の充実を図るべく市外の古書店に通い、店主との関係も深めていきました。同じ古書店に通われていたのが、本の寺子屋の企画を初年度から務めていただいた河出書房新社『文藝』の元編集長、長田洋一氏でした。古書店を介して内野氏のことを知った長田氏が2011年に当館を訪ねて来られ、お二人は意気投合、以前から抱いていた思いが一致し、「本の学校」をモデルとした本の寺子屋につながる構想ができていきました。しかしながら内野氏はこの年度に退職することを決めていたため、実施までの道筋をつけることに奔走し、実際の運営はそれ以後の職員が担当し、今に続いています。

少し話がそれますが、内野氏は退職の直前、希望する職員にむけて5回の内部研修を実施しています。第4回のテーマが「日本の取次会社と出版流通」。この研修で筆者は、本を毎日扱いながら、出版流通というものに目を向けてこなかった自分を恥じるとともに、この分野への興味関心が格段に高まりました。問題意識を持つことで、研修や講演会に参加するようになり、書店との交流機会も増え、選書の在り方を考えたり、企画事業を計画したり、と次につながっていきました。『人文会ニュー

ス』を図書館で所蔵すべきではと提案されたのも内野氏です。

話を戻し、本の寺子屋の運営方法についても少し触れたいと思います。主な役割分担は次のとおりです。

・主催：塩尻市・塩尻市教育委員会

・講演会企画：長田洋一氏／図書館

・展示企画：図書館（出版社やミュージアムなどさまざまな団体に協力を依頼）

・予算：図書館

・広報、準備全般・当日の運営等：図書館

・書籍販売・サイン会：塩尻書店組合（神田堂・興文堂・

中島書店・丸文書店 ※五十音順）

講演会やギャラリートークの後に、市内に本店のある書店で組織された塩尻書店組合の協力を得て、本の販売とサイン会を行っているのも特長のひとつです。参加年齢層の固定化などといった課題もありますが、講師の息遣いが聞こえる近さで、質の高い講師陣の講演などを聴くことができる本の寺子屋は多くの方々々に支持され、これまで延べ1万5千人以上にご参加いただきました。2015年には「本の可能性を子どもたちと考える。」

をテーマに、子どもたちに本の魅力を伝える「信州しおじり子ども本の寺子屋」事業を開講し、2017年から、地域の文化に光を当てる「地域文化サロン」も組み込みながら現在まで継続しています。市内外、多くの皆様とさまざまな角度で本の可能性について考える場をつくり続けられたことは、地方発の文化の創造と発信につながっていると、言ってもよいのではないでしょうか。

残念ながら内外から長く支えてくださっていた内野氏、長田氏は鬼籍に入られてしまいました。お二人の本の持つ可能性を信じる思いは脈々と塩尻市立図書館に根付き、受け継がれています。本の寺子屋は2026年に15周年を迎えます。引き続きご支援いただきながら、長くバトンをつなぎ続けたいと、次への思いを新たにしています。

この事業にご興味を持たれた方は「信州しおじり本の寺子屋」研究会による『本の寺子屋』が地方を創る―塩尻市立図書館の挑戦』（東洋出版、2016年）、『本の寺子屋』新時代へ―塩尻市立図書館の挑戦2』（東洋出版、2021年）もぜひお読みください。

Book Fan Newsletter(ブックファンニュースレター)

塩尻書店組合と塩尻市立図書館は、2012年7月から、合同で本の情報紙の発行を続けています。書店は、お店のお知らせとともに今店頭にあるおすすめ本を、図書館は、それぞれの分野の担当が遡っておすすみたい本を選び、紹介文を書いています。現在はA4を二つ折りにしたサイズで350枚をカラー印刷し、図書館と書店店頭で配布しています。2026年3月に165号を発行しましたが、塩尻市立図書館のホームページでは1号からご覧いただくことができます。1号には発行に至った理由が次のように書かれています。

「塩尻市立図書館では、同じ本を複数冊買うことを減らし、その分幅広いジャンルから本を買っています。話題の本などは予約が多く入ると、長期でお待ちせしめまう場合もありますが、書店に行くときすぐに購入できることも、便利に使っていただき、充実した読書ライフをお過ごしください。」

1号発行から10年以上たった今でも、当館の購入方針



買いたいと思った本があったら、地元の書店を使ってほしい！
そんな願いも込めて発行している「Book Fan Newsletter」

は変わりません。一般書で複本購入を検討するのは15件以上予約が入った場合からで、所蔵は最大4冊までと決めて対応しています。塩尻市には大型書店はありませんですが、図書館と書店をあわせたら、相当数の本を目にすることができるとは思います。その環境づくりのために、書店の店頭とはできる限り重ならないような蔵書構成を

意識し、図書館がショーウィンドウとなり、こんな本もあるんだと思ってもらえるようなラインナップを揃えることを目指しています。住民のために幅広く多種多様な本に触れられる機会を創出する、このことは地方に立地する公共図書館の役割のひとつなのだと思います。

おしり

これまでの当館の取り組みを、的を絞って振り返ってきましたが、当市が古田晁の出生地だったことは特に重要で、また新館開館にあわせて、資料・人・施設の充実が図られたこと、市民の要望から司書の育成ができる館長が着任したことは大きな転機であったと感じました。その後の館長たちも、本の可能性について考える火を絶やすことなくつなぎ続け、今の塩尻市立図書館があります。職員の学ぶ意欲や発案する企画を、職員同士が応援し合える環境があることも、連携や協力を伴う事業の推進につながっていると感じています。

「はじめに」で触れた問い、地域の読書環境を整える図書館であるためには、地域を知ることが大前提となり

ます。また、良書を選定するためには、本や著者、出版社などの知識を深めるだけでなく、その地域にとってよい良い本とは何なのか、考え続ける必要があります。そして、読書環境を整え良書を用意するためには、予算を獲得する努力が不可欠です。それには、住民や地域からの評価、図書館があつてよかつたと思つてもらえるような信頼を得ることができるとなつてきます。

私たちは、本との出会い・興味関心を高める場をひとつでも多く生みだしたいとさまざま取り組んできました。でもそれは、そういつた思いに賛同し、協力、参加してくださいる関係者の皆様・地域の方々がいてくださったからこそ、続けてこられたのだと思います。この場を借りてあらためて感謝申し上げます。

第12 図書館員は、読者の立場に立つて出版文化の発展に寄与するようつとめる。

出版の自由は、単に資料・情報の送り手の自由を意味するのではなく、より根本的に受け手の知る自由根ざしている。この意味で図書館は、読者の立場に立つて、出版物の生産・流通の問題に積極的に

対処する社会的役割と責任を持つ。また図書館員は、「図書館の自由に関する宣言」の堅持が、出版・新聞放送等の分野における表現の自由を守る活動と深い関係を持つことを自覚し、常に読者の立場に立つてこれら関連分野との協力につとめるべきである。

これは、1980年に日本図書館協会によつて採択された、図書館職員の倫理や任務を規定する「図書館職員の倫理綱領」の中の「文化の創造への寄与」の項目に書かれているものです。

「読者の立場に立つて出版文化の発展に寄与するようつとめる」図書館職員たり得るためには、その地域に暮らす読者を知ることが求められるのだと思います。

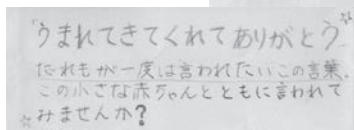
地域とよく向き合い必要としている人と必要とされている本を結ぶ。そのために、司書という専門性を高め持っている資源を存分に活かす。図書館単独で実現できないことは志を同じくする方々の協力を仰ぐ。そして、本の可能性を信じ、学び、実践し続ける。

今はこの方法でしか、問いに向き合える方法はないのかなと思つています。自問自答を繰り返す日々は続きます。

〈連携企画の一例〉



書店での様子

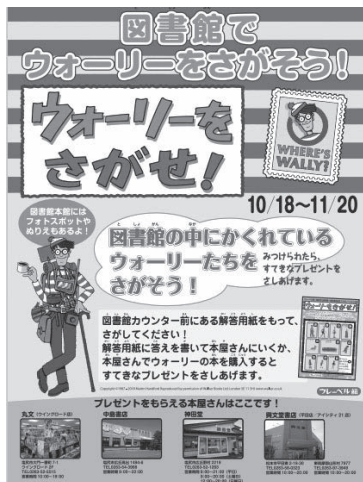


実際に応募された帯

2016年に実施した「本の帯デザイン大募集in塩尻」は書店に推薦いただいた本の、帯のデザインを一般募集するというもの。各書店によって最優秀賞に選ばれた帯は実際に書店にて本に巻かれ、販売された。帯の印刷は藤原印刷(松本市)によるもの。藤原印刷には、「本ができるまでツアー」にご協力いただき、その後の企画にもつながった。

「贈り帯(おくりたい)」は、2017年～2018年に実施した、市内書店で贈り物用の本を購入すると、藤原印刷デザイン・印刷の、メッセージが書ける本の帯をプレゼントするという企画。

本をプレゼントする習慣や、図書館や書店を利用するきっかけになればと実施した。図書館、書店、印刷会社の3者に共通する、「もっと本に親しんでもらいたい」という思いも込められている。贈り物におすすめの本の選定は、当時在籍していた絵本専門士2名で行った。



2018年に「フレーベル館×図書館×市内書店」の3者で実施した企画。発案は当時在籍していた職員で、図書館では約1700人に参加いただいた。書店でプレゼントを受け取られた人数は685人。塩尻市以外の自治体で2025年にも実施されるなど、現在も続く企画となっている。

2025年に実施した「作家 乙川優三郎からの手紙展」は、乙川氏の最新作『立秋』の舞台が塩尻市だったことで、展示を企画し実現したもの。乙川氏からは色紙、メッセージ、書き下ろしエッセイが提供され、編集の国田氏からは、創作の過程がわかる展示物を貸していただくなど、全面的にご協力いただいた。



図書館での展示の様子。所蔵する全著作も一緒に置いた。



一部書店での様子。乙川作品を購入された方には、特典として、図書館で配布したものと異なる書き下ろしエッセイがプレゼントされた。

長野トーン会青年部主催「つなごう読書の絆・諏訪湖一周マラソン」に参加して企画につながった一例



協力・暮しの手帖社
「戦中・戦後の暮らしの記録」展(2018)



協力・集英社
『『アジア人物史』 完結記念』展(2024)

子どもたちに、より本に親しみを持ってもらえるよう、地元の印刷会社や製本会社に協力いただき、「信州おじり子ども本の寺子屋」事業の中で、本ができるまでを見学するツアーを毎年実施している。



人文会会員名簿

〒113-0033 文京区本郷2-20-7 みすず書房内

2026年4月現在

社名	担当者	〒	住所	電話	FAX
大月書店	金田壮史	113-0033	文京区本郷2-27-16 2F	03-3813-4651	03-3813-4656
紀伊國屋書店	段塚省吾	153-8504	目黒区下目黒3-7-10	03-6910-0519	03-6420-1354
慶應義塾大学出版会	乙子 智	108-0073	港区三田2-17-31	03-3451-6926	03-3451-3124
勁草書房	束原亮佑	112-0005	文京区水道2-1-1	03-3814-6861	03-3814-6854
春秋社	吉岡 聡	101-0021	千代田区外神田2-18-6	03-3255-9611	03-3253-1384
晶文社(休会中)		101-0051	千代田区神田神保町1-11	03-3518-4940	03-3518-4944
誠信書房	郡司恵太	112-0012	文京区大塚3-20-6	03-3946-5666	03-3945-8880
青土社	森 卓巳	101-0064	千代田区神田猿樂町2-1-1 浅田ビル1F	03-3294-7829	03-3294-8035
創元社	水口大介	101-0051	千代田区神田神保町1-2 田辺ビル	06-6231-9010	06-6233-3111
筑摩書房	河内秀憲	111-8755	台東区蔵前2-5-3	03-5687-2680	03-5687-2685
東京大学出版会	足立 佑	153-0041	目黒区駒場4-5-29	03-6407-1069	03-6407-1991
日本評論社	荻原弘和	170-8474	豊島区南大塚3-12-4	03-3987-8621	03-3987-8590
白水社	小林圭司	101-0052	千代田区神田小川町3-24	03-3291-7811	03-3291-8448
平凡社(休会中)		101-0051	千代田区神田神保町3-29	03-3230-6572	03-3230-6587
法政大学出版局(休会中)		102-0073	千代田区九段北3-2-3 法政大学九段校舎1F	03-5214-5540	03-5214-5542
みすず書房	片桐幹夫	113-0033	文京区本郷2-20-7	03-3814-0131	03-3818-6435
ミネルヴァ書房	本橋弘行	101-0062	千代田区神田駿河台3-6-1 菱和ビルディング2F	03-3525-8460	03-3525-8461
吉川弘文館	片山伸治	113-0033	文京区本郷7-2-8	03-3813-9151	03-3812-3544

代表幹事 片桐幹夫
 会計幹事 片山伸治
 書記幹事 水口大介

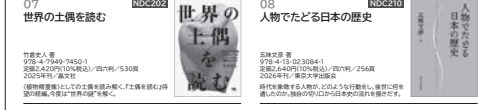
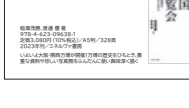
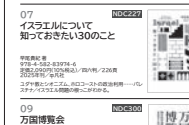
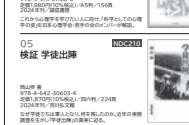
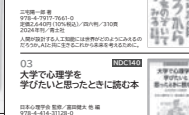
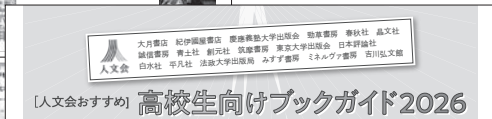
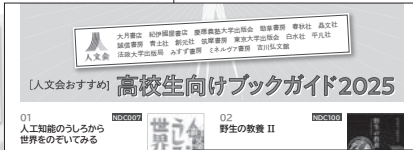
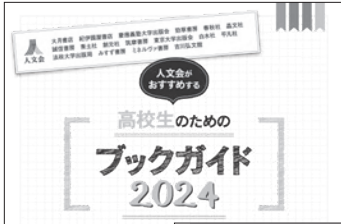
《◎委員長(幹事) ○副委員長》

販売・企画委員会 ◎吉岡 聡 ○段塚省吾 金田壮史・郡司恵太・足立 佑・荻原弘和
 調査・研修委員会 ◎森 卓巳 ○束原亮佑 河内秀憲
 広報委員会 ◎乙子 智 ○本橋弘行 小林圭司

人文会ホームページ <https://www.jinbunkai.com/>
 (各種情報/各社へのリンクはこちらからどうぞ)

「高校生向けブックガイド」のご案内

人文会では会員各社の刊行物の中から、高校生に読んでほしい書籍を2点ずつ厳選し、「高校生向けブックガイド」として1枚のリーフレットにまとめました。書店外商部様や書店店頭でのフェアなどで活用いただいております。



慶應義塾大学出版会

<https://www.keio-up.co.jp/>

静かなる占領

したたかな敗者としての日本人

賀茂道子著 日本の一般市民は GHQ による「占領」をどのように受容したのか。当時の社会調査データや日記、投書、手紙、漫画等の一次史料から、実際の民衆の姿を描き出す。◎3,740円

芸術をカテゴライズすることについて

批評とジャンルの哲学

銭清弘著 芸術を分類する行為そのものを哲学的に分析し、批評や鑑賞のルールを形づくる「カテゴリーのダイナミクス」を解明。分析美学の新潮流を切り拓く注目作。◎3,520円

〒108-8346 東京都港区三田2-19-30【価格税込】
Tel 03-3451-3584 Fax 03-3451-3122

治安維持法と「国体」

治安維持法が威力の源泉とした「国体」は、どのように位置づけられていったのか。施行する側、適用される側、それぞれの解釈の変遷を資料をもとに読み解く。「新しい戦前」のいま、あらたな「国体」を生み出さないために。

「できなさ」からはじまる倫理学

能力や生産性が高いという尺度を捨てて、「できなさ」から社会を見てみると…。生きづらさを生み出す分断の時代だからこそ、「生の無条件の肯定」を掲げ、「共に生きる」社会と人の関係を考える。

【著】野崎泰伸
【定価】2200円(税込)

【著】荻野富士夫
【定価】3080円(税込)

大月書店

〒113-0033 東京都文京区本郷2-27-16

TEL 03-3813-4651 HP otsukishoten.co.jp

人文書販売の手引き

第3版



- 哲学・思想
- 心理
- 宗教
- 歴史
- 社会学



https://jinbunkai.com/jb_contents/tebiki-3rd/

國分功一郎さん 推薦!

働くことの哲学 9刷

ラース・スヴェンセン 小須田健訳

働くなかで、

私たちは世界に爪あとを残してゆく

「仕事は人生の意味そのものを与えてくれるか」

「給料の額と幸福感は比例するか」……

「給料の額と幸福感は比例するか」……
ノルウェーの哲学者が、幸福で満たされた生活を求める中で、「仕事」がどのような位置を占めるのかを探求する。

▼税込1870円

紀伊國屋書店 出版部：東京都目黒区下目黒 3-7-10
新宿本店 TEL：03(3354)0131

感情表現という言葉を読み解く

表情を「交渉」から考える

マーク・チャンギージ/ティム・バーバー 著 佐藤 弥 監訳
益田 靖美 訳 人はなぜ表情で感情を表すのか？ 表情の進化を「交渉」の観点から体系づけ、心理学・認知科学分野に新たな理論的視座を示す意欲作。 **3520 円**

感覚・知覚心理学 ハンドブック 第三版

和氣典二・重野 純・村上 郁也 編

『感覚・知覚心理学ハンドブック』の第三版が登場！これまでの研究から最新の知見まで、国内外の感覚・知覚研究を一冊に網羅。 **57200円**

トラウマをめぐる10の神話

最新研究から解き明かす性格特性・レジリエンス・治療
ジョエル・パリス 著 黒田章史・市毛裕子 訳
トラウマ概念の漸動に警鐘を鳴らす著者が、膨大な研究結果からトラウマの誤解を解き、生物心理社会モデルによる理解と治療を示す。 **2640円**

誠信書房 Tel 03-3946-5666
SEISHIN SHOBO 東京都文京区大塚 3-20-6

実践

ディープ・ アクティブラーニング

高校から大学・社会へ広がる
深い学びのデザイン

松下佳代 [編著]

真の意味での「深い学び」を目指す
高校・大学での授業実践を紹介し、
「ディープ・アクティブラーニング」
の現在地を明らかにする。

税込3300円

勁草書房 TEL 03-3814-6861
FAX 03-3814-6854
〒112-0005 東京都文京区水道2-1-1
<https://www.keisoshobo.co.jp>

同性愛について ピーテル・P・アドリアンス 他
科学は何を語ってきたのか
同性愛科学「ゲイ・サイエンス」の歴史をひもとく。男性同性愛に関する科学的研究の歴史と哲学を探索する待望の書。 **4180円**

シン・モディリアアーニ 岡田温司
ムード、スード、ホヘン、モード、フェイク。5つの視点と豊富な図版からその真髄に触れる異色の芸術論にして決定版。 **2860円**

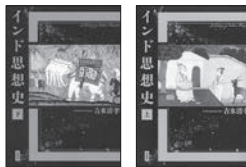
保護犬の運命を変えた女性
〈動物保護〉を問い直す
キャロル・ミザース
日常的な暴力がはびこる傍らで、彼女は命懸けの動物保護活動に取り組んできた。その道程を描いた渾身のドキュメンタリー。 **3740円**

青土社 東京神田神保町 ☎03-3294-7829
<http://www.seidosha.co.jp/> (価格税別)

最新の研究成果を反映したインド思想史の決定版！
インド思想史
吉水清孝

【上巻】
ヴェーダ、ウパニシャッド、初期仏教と
戒律、アビダルマ、大乘仏教、叙事詩、
法典、サートンキヤ・ヨーガ、ニヤヤ・
ヴァイシエーションカまでを収録。38650円

【下巻】
文法学、ミーマーンサー、ヴェエダーン
タ、中観、唯識、仏教知識論、ヒンドウ
思想、密教が扱われ、中世初期の典と生
身解脱に関する補論も収録。4180円




春秋社 東京都千代田区外神田2-18-6 (税込)
☎ 03-3255-9611 FAX 03-3253-1384

宇野重規・加藤 晋・井上 彰
[編]

リベラリズム

基礎からフロンティアまで



31のキートピックと21の著作解説で、現代リベラリズムを、基礎から実践まで包括的に理解する。

3,190円(税込)

UTP 東京大学出版会
〒153-0041 東京都目黒区駒場 4-5-29
TEL 03-6407-1069 FAX 03-6407-1991
<https://www.utp.or.jp/>

創元社

決定版 西洋画家図鑑

池上英洋 著

◆ 匠巻の西洋画家総覧

A5判・並製・320頁 定価46200円

ピザンティンから20世紀の現代絵画まで名だたる画家たち365名とその代表作を編年で収録。絵画データを厳選したフルカラー決定版。

大阪市中央区淡路町4-3-6(税込)
TEL06-6231-9010 / FAX06-6233-3111

生成AIにできること、できないこと

「フランケンシュタインの怪物」を飼いならす

推薦! 遠藤信博氏
経団連副会長、日本電気(NEC)元会長

藤本浩司+柴原一友[著]
テンソル・コンサルティング株式会社[監修]

生成AIのしくみを、専門知識にもとづき、やさしくひも解く。本質を正しく理解することで、新時代を生き抜くヒントが見えてくる。 ●2530円

解離ってなんだろう

症例でわかる見立てと対応

古田洋子[著] ●2090円

たくさんの子どもの具体的な症例から、誤解されやすい解離の多様な症状を学ぼう。

日本評論社 ☎03-3987-8621 (営業部)
<https://www.nippyo.co.jp/>
〒170-8474 東京都豊島区南大塚3-12-4 表示価格は税込価格

鹿島茂 『共同幻想論』に挑む

知的刺激に満ちた1500枚に及ぶ圧倒的論考、ここに誕生!!

● 定価5060円

国家の起源にある謎とは?
吉本隆明の名著にして難解をもって知られる『共同幻想論』に、鹿島茂が(逆行読み)という手法、またE・トットらの家族人類学の最新の知見を武器に挑む!

挑む——家族人類学的考察

筑摩書房 ※定価は10%税込です。
<https://www.chikumashobo.co.jp/>
ブックサービス ☎0120-29-9625(フリーコール)

2026年4月25日発行 年3回発行 第152号

発行所 人文会

〒113-0033 東京都文京区本郷2-20-7 みすず書房内

編集協力 アジュール・プロダクション

印刷 中央精版印刷株式会社

<非売品>